

強度弱視者の歩行指導に関する事例研究

—指導者の言葉かけと訓練生の気持ちに着目して—

高嶋 麻矢（愛知県立名古屋盲学校）

青柳 まゆみ（愛知教育大学）

松枝 孝志（名古屋市総合リハビリテーションセンター）

要旨：

目的：弱視者への歩行指導1事例を分析し、効果的な指導や言葉かけ、当事者の成長の過程を整理して、弱視者の歩行指導をする際の一助とすることを目的とする。

方法：対象は、強度弱視の男性1名である。訓練の様子をビデオとボイスレコーダーで記録し、その内容を分析した。

結果と考察：指導者の言葉かけを内容に着目して整理すると、一般的な知識、その場に限定した状況説明、見え方等の確認、フィードバックの4種類に分類できた。一般的な知識については、視覚と視覚以外の両方の手がかりが示されていた。見え方の確認は頻繁に行われ、訓練生の不安を軽減させるような状況説明や、どこに不安を感じているか問う確認がされていた。インタビュー結果からは、目に見える大きなつまずきはなくても訓練生は恐怖感を抱いていることが分かった。一方、訓練を重ねていくことで恐怖感が解消されていくことも確認できた。

キーワード：歩行訓練、弱視者、つまずき、インタビュー

1. 目的

弱視者への歩行指導では、一人一人の異なる視機能はもちろん、その日の本人の体調や環境によって変化する見え方も把握する必要がある。また、芝田（2010）では、弱視者は、視覚への依存度が高く、そのため聴覚や触覚などの視覚以外の感覚を使い分けることが難しいとされており、指導者は弱視者特有の歩行の困難さも理解しておかなければならない。つまり弱視者へ歩行指導する際、指導者には、個人や場面に応じた指導ができるような全盲者への歩行指導にはない指導技術が求められる。しかし、弱視者への歩行指導は、その多様性から、全盲者への歩行指導のように統一された指導法や指導プログラムに当てはめにくい側面があり（中村・山口、

2021）、指導書等においても、弱視者への歩行指導に特化した内容の記述が少ない。

そこで本研究では、歩行訓練士による弱視者への歩行指導1事例を指導者の意図や訓練生の内省を踏まえ、第三者視点で分析し、効果的な指導や言葉かけ、当事者の成長の過程を整理して、歩行訓練を担う者が弱視者へ歩行指導をする際の一助とすることを目的とする。

2. 方法

2.1. 対象

対象は、視力が、右 0.02、左 0.03 の強度弱視の男性1名である。交通事故の外傷により視力が低下し、その約1年後よりリハビリテーション施設にて歩行訓練や生活訓練を受けた。歩行の際、視覚補助具等の使用はなかった。

2.2. 期間

歩行訓練は201X年8月～201X+1年2月に計11回実施された(表1)。筆者が観察を行ったのは、第4回～第10回の計7回である。訓練は1～2週間に1回行われ、訓練時間は約1～2時間であった。

2.3. 手続き

①訓練場面の観察：歩行訓練の様子をビデオカメラとボイスレコーダーで記録し、歩行訓練士の指導内容や言葉かけ、当事者の発言やつまずきなどを分析した。

②インタビュー調査：毎回訓練後に訓練生と指導者双方にインタビュー調査を行い、訓練の観察では見えてこなかった歩行訓練士の考えや当事者の内省を調査した。調査項目は、以下の通りである。

1) 指導者

訓練のねらい、指導で気を付けたこと、つまずきと思われた場面、その日の評価・その後の目標を調査した。

2) 訓練生

1番の学び、良かった・分かりやすかった指導内容、怖いと感じた場面、歩行に対する自信・不安や期待を調査した。

3. 結果と考察

3.1. 指導場面ごとの言葉かけの内容

訓練生に対する指導者の言葉かけをその内容に着目して整理すると、①一般的な知識、②その場に限定した状況説明、③見え方・気持ち等の確認、④フィードバック(以下、知識、状況説明、確認、フィードバック)の4つに分類できた。以下に、各項目の具体的な内容やそれらの意義について考察していく。

3.1.1. 横断：訓練生は、視力が低下してからも横断歩道を渡った経験はあるが、状況判断の主な根拠は、周りの人の流れなど視覚の手がかりであった。第4回の訓練では、「知識」として、できるだけ視覚を使わないよう指示があり、信号待ちの場面では、訓練生と同じ方向を向く信号待ちの車のエンジン音が聴覚の手がかりとして提示された。芝田(2010)は、弱視者への歩行指導では、視覚、聴覚、触覚等の感覚を状

表1 指導の概要

テーマ(場所)	指導内容
屋内歩行(センター内)	
屋外歩行(センター周辺)	
横断①(センター周辺)	
横断②(センター周辺)	音響信号がある十字路口
	信号(音なし)がある十字路口
	信号(音なし)がある変則的な交差点
	信号のない横断歩道 歩道
電車の利用① (地下鉄A駅→地下鉄B駅→地下鉄A駅)	駅構内の基本知識
	ホームの基本知識
	電車の乗降
電車の利用② (地下鉄A駅→地下鉄C駅→地下鉄A駅)	電車の乗降
	C駅についての基本知識
	駅構内の歩行
	その他 ・駅員への誘導依頼の方法
電車の利用③ (地下鉄A駅→地下鉄D駅→地下鉄A駅)	電車の乗降
	D駅についての基本知識
	混雑した駅構内の歩行
電車の利用④ (地下鉄A駅→地下鉄E駅(乗換のみ) →地下鉄F駅→地下鉄G駅→地下鉄A駅)	電車の乗降
	E駅についての基本知識
	F駅についての基本知識
	混雑した駅構内の歩行
	G駅についての基本知識
電車の利用⑤ (地下鉄A駅→地下鉄C駅(乗換のみ) →地下鉄H駅・JR H駅 →JR I駅・地下鉄I駅→地下鉄A駅)	電車の乗降
	混雑した駅構内の歩行
	H駅についての基本知識
	I駅についての基本知識
	その他 ・音声案内での切符の買い方
夜道①(駅周辺)	駅構内の歩行
	夜道の歩行
	バス
夜道②(自宅周辺)	

況に応じて使い分ける方法を具体的に示す必要があると述べており、そのことが本事例でも実践されていた。

「確認」として最も多かったのは、見え方の確認であった。最初の交差点では、「今日の信号の見え方はどうですか？」という指導者の問いかけに対し、訓練生は「曇っていて日差しも強くて、青が見やすい。」と答えているが、同じ日に別の交差点へ移動したときには、訓練生は「青が見つらい。」と話していた。指導書でも、弱視者の歩行指導において、天候や時間帯で見え方が変わることには注意しなければならないことはよく言われているが、本事例でも同様の様子が見られた。

3.1.2. 駅構内：ホームの構造や券売機の音声案内の利用方法、混雑時の歩き方や白杖の振り方等、全盲者に指導されることが「知識」として多く伝えられた。

第8回の訓練では、駅の構造について以下の

ように説明があった。

「E駅は“く”の字みたいに交わっている。(ホームの)端が乗り換えになります。」

「F駅は、人通りの多いコンコースの真下に○線があるイメージです。」

インタビューでは、訓練生は上記の説明が分かりやすかったと述べており、駅の全体像を伝えるために、路線の交わり方などの全体像を伝えることは有効な指導であったと考えられる。訓練生は「(以前)いつもと違う階段を使ったところ行先の違う電車に乗ってしまった。」という経験談を話しており、駅全体の地図を頭の中に描くことは弱視者の歩行においても重要な手がかりになると言える。

「状況説明」については、「この駅は人が少ない。」「皆左に流れていっている。乗り換えをするためです。」というような人の量や流れに関する言葉かけがあった。

「確認」では、「人混みは緊張しますか?」「(周りの人にぶつからないようにするために)神経使いましたよね?」というような、訓練生の気持ちに寄り添うような言葉かけが多く見られた。

「フィードバック」としては、「しっかり周りを気にしていて、杖を振ることができています。」「最初の時と比べると力が抜けている感じがします。」などの言葉かけがあった。訓練生は、混雑した駅での歩行に特に自信をもてていなかったが、回を重ねるごとに、訓練生の自信が高まっていることがインタビュー結果から分かった。上記のようなフィードバックは、訓練生が自信をつけていく上で重要な言葉かけだったと考えられる。

3.1.3. 電車の乗降：見え方に関する「確認」は、第5回の訓練で「(この位置から)電車のドアは見えますか?」と尋ねたのみであった。電車の乗降動作は全盲者と手順や手がかりが変わらないためであると思われる。一方、多かったのは気持ちや理解の確認であった。難なくこなしているように見えてしまう歩行であっても、丁寧な問いかけをすることによって、訓練生が感じている手ごたえや不安をしっかりと汲み取り、指導に生かしている様子が見られた。

「フィードバック」には、以下のようなものが

あった。

「電車の中に足を踏み入れる前に先に杖を中に置いてあげるといいです。」

この指導前後のビデオ映像を確認すると、フィードバック前は白杖を車内に入れるのとほぼ同時に足を踏み入れているが、フィードバック後は白杖でしっかり車内を確認してから乗車することができている様子が見て取れた。訓練生は、フィードバック前も乗車できていなかった訳ではないが、より確実な白杖操作の指導を受けたことで、その後のつまずきを回避することにつながったと予想される。

3.1.4. 夜道：「知識」について、夜道に使う手がかり、手がかりの見つけ方、白杖の振り方の指導があった。訓練生は手がかりとして、街灯や店の光などを使っていると話していたが、それに加えて指導者は、車のライトや光の当たった白線、歩道と車道との段差などを手がかりとして挙げていた。また、視覚を使う手がかりの中でも、できる限り遠くの明かりを目指して歩くと歩きやすいことも指導された。インタビューで訓練生は、「知らなかった目印をたくさん知れたこと」がその日の1番の学びだったと述べており、手がかりを多く教えてもらった指導に満足感を感じていた。

3.1.5. その他：その日の訓練のテーマ以外にも、たまたま遭遇した機会を利用して行われた指導が複数あった。例えば、雨の日の歩行、歩道橋付近の注意、エスカレーターの利用、バス内の歩き方等がその例である。

3.2. 指導者と訓練生のインタビュー調査比較

毎回訓練後に指導者と訓練生に別々にインタビュー調査を行い、訓練の観察だけでは見えてこなかった指導者の考えや訓練生の内省を調査した。

3.2.1. ねらい／学びの内容：指導者のねらいと訓練生が感じた学びは、概ね一致していた(表2-1)。

全体として、訓練生は初めての経験に学びを感じており、「見えていた時と全く異なる電車の乗り方(第5回)」や、「乗り換えのしやすさを意識した乗降位置(第6回)」などを具体的に語っ

ていた。

指導者が意図していても、訓練生が学びとして取り上げていないものは、訓練生にとってその目標達成が容易であったことが理由の一つだと予想される。

3.2.2. 配慮事項とその受け止め方：指導者と訓練生の回答は一見対応していないように見えるが、それぞれの訓練を振り返ると、指導者が心がけて臨んだことが、訓練生の良かったと感じられる指導につながっていることが分かった（表 2-2）。例えば、第 7 回で指導者が気を付けたのは「恐怖を感じさせないこと」、訓練生が良かったと思った指導は「駅の光などの目印」である。指導者は恐怖感を軽減させるために、訓練の中で視覚的手がかりを積極的に提示しており、それは訓練生にとって分かりやすい指導となっていた。指導者の配慮は確実に訓練生の理解や安心感につながっていたと言える。

3.2.3. つまづきについて：指導者が「特になし」と答えていることが多いのに対し、訓練生は毎回の訓練で怖かった場面を答えている（表 2-3）。このことから、歩行訓練の中で実際に支障をきたしている訳ではないものの、訓練生の心の中は不安な気持ちで溢れていることが分かる。

しかし、指導者は第 6 回で「混雑している場所で歩きづらそうだった。つまづきとは言わないかもしれないが、気持ちの変化を感じた。」と話しており、訓練生の恐怖感に気付いていた。加えて、恐怖感を抱かせないように意識して指導していたことが、表 2-2 の第 6 回～第 8 回のインタビュー結果から見て取れる。

3.2.4. 評価：指導者の評価と訓練生の自己評価は概ね一致していた（表 2-4）。これは、指導者が訓練中に丁寧なフィードバックをしていたこと、毎回の訓練後に振り返りやその後の訓練の内容について話し合っていたことなどが影響したと予想される。

指導者が考える次の目標と、訓練生が思う不安や期待も大方重なっており、次の訓練ではそれらの目標が主な指導内容として取り扱われて

いることが分かった。

第 9 回の訓練では、指導者は目標として「練習を重ねて電車に慣れていくこと」を掲げており、訓練生も「(自分で練習の) 回数を重ねていけば電車は全て大丈夫」と語っている。お互いの手ごたえが重なった上で、第 10 回の夜間歩行の練習に切り替わっている。テーマの切り替わりのタイミングも、指導者の意図と本人の気持ちが一貫していることがこの比較から分かった。

4. まとめ

弱視者の歩行の課題として、本事例で特に目立ったのは恐怖感であった。目に見えたつまづきはないものの、混雑した場所や広い空間では極端に警戒する様子が多く見られた。しかし、視覚以外の感覚の活用を含めた訓練を重ねていくことで恐怖感や不安感が解消されていくことがインタビュー結果から確認できた。

弱視者へ歩行指導をする際に気を付ける点は、まず、訓練日や訓練場所が変わる度に見え方を確認することである。入念なやり取りをした上で、提示する手がかりも変えていかなければならない。次に手がかりについては、視覚を含めたさまざまな感覚をバランス良く活用することが求められる。視覚以外の手がかりや地図イメージの構築は全盲者と一致していた。また、訓練生の恐怖感を軽減させるような配慮として、特に訓練初期や初めての訓練場所で訓練をする際には、積極的に状況説明をすることが望ましい。訓練生が安心できるような言葉かけ、訓練生が感じている手ごたえや不安を確認するための対話、上手くできたときのフィードバックなどが訓練生の自信につながっていく。

文献

- 中村里津子・山口崇（2021）弱視児童・生徒の歩行指導. 弱視教育, 59(3), 7-14.
 芝田裕一（2010）視覚障害児・者の歩行指導—特別支援教育からリハビリテーションまで—. 北大路書房.

表 2-1 インタビュー結果比較—ねらい／学びの内容—

回	指導者：その回の訓練のねらい	訓練生：その回の訓練での1番の学び
4	・ 前回の学習をさまざまな種類の交差点に応用すること	・ 変則的な交差点の渡り方
5	・ 電車の基本知識を知ること ・ 電車の乗降動作	・ 電車の乗り方
6	・ 電車の乗降動作 ・ C駅の乗り換え ・ 混雑している場所の歩行	・ 電車の乗る位置 ・ 混雑時の歩行
7	・ 今までとは別の構造をした駅の練習	・ 改札やエスカレーターの向き
8	・ 混雑した駅の練習 ・ まだ歩行訓練で行ったことのない駅の構造を知ること	・ G駅などの駅の構造を知れたこと
9	・ 色々な種類の電車を経験すること ・ 今までの訓練の内容が習得できているかの確認	・ 音声案内での切符の買い方
10	・ 普段の夜間の歩行動作の確認	・ 知らなかった目印をたくさん知れたこと

表 2-2 インタビュー結果比較—具体的な配慮事項とその受け止め方—

回	指導者：指導する上で気を付けたこと	訓練生：良かった・分かりやすかった指導内容
4	・ 視覚とそれ以外の感覚の両方を使うことができているか注意すること	・ 変わった形の交差点の説明
5	・ 人の少ないホームなど練習しやすい環境を指導場所を選んだこと	・ 杖をホームと電車の隙間に落として扉を探す方法
6	・ 恐怖感を感じさせないような的確な指示をすること ・ 人とぶつからせないようにすること ・ 今後のことを考慮し、馴染みのある駅かつ、ある程度混雑している駅を訓練場所を選んだこと	・ 混雑時の杖の使い方について
7	・ どこで恐怖を感じているのか確認しながら、注意すべきポイントを補う指導をすること	・ D駅の光などの目印
8	・ 前回感じていた恐怖心をできるだけ抱かせないような指導をすること	・ 地下鉄と普段歩いている道を交えて（駅の構造を）教えてくれたこと
9	・ 電車の基本ができているのか確認すること ・ 環境の情報提供を心掛けた	・ 駅にある店などの目印
10	・ どこに怖さを感じているかを確認すること ・ どこに注意を向けられているのか確認すること	・ 信号がない交差点での対応

表 2-3 インタビュー結果比較—つまづき—

回	指導者：つまづいていたと思われた場面	訓練生：怖いと感じた場面
4	・ 特になし	・ 段差と間違えてしまうような急な坂 ・ 工事現場の周りとの交差点 ・ コンビニの入り口
5	・ 電車の乗降動作で杖先をホームの淵に落とすのを忘れていたことがあった	・ 扉を探す時に杖をいったん落とすこと
6	・ 特になし	・ C駅を降りた時の混雑 ・ 途中で電車にたくさん人が乗ってきた時
7	・ 点字ブロックに集中しすぎて、あまり周りを見れていなかった	・ 空間が広いところ ・ エスカレーターから次の点字ブロックまで離れているところ
8	・ 特になし	・ F駅の外（の広い空間）
9	・ 特になし	・ JRのホーム
10	・ 杖先が地面から離れて障害物を見逃してしまうことがあった	・ 道路の高架下の暗い階段 ・ 階段の一段の幅が広がったところ

表 2-4 インタビュー結果比較—評価—

回	指導者：その回の歩行の評価・その後の目標	訓練生：歩行に対する自信・その後の不安や期待
4	評価 ・ 集中し周りを気にすることができていた 目標 ・ より激しく雨が降っているときの歩行 ・ 暗い場所での歩行	自信 ・ 訓練で行動範囲が広がっている感覚がある 不安や期待 ・ 電車に自力で乗れるようになりたい
5	評価 ・ 全体として落ち着いてできていた ・ 飲み込みが早いため電車の乗降動作も練習をすればコツをつかめるはず 目標 ・ 今日学習したことを色々な電車に応用させていくこと	自信 ・ 家の最寄り駅や通勤で使う駅など知っている駅ならば大丈夫 不安や期待 ・ 初めて行く駅や人が多い駅はとても不安
6	評価 ・ 混雑の中周りを気にしつつもあわてないで冷静に判断していたのが良かった 目標 ・ 乗り換えなど色々な場所を経験していくこと	自信 ・ 家からセンターまでは来れると思う 不安や期待 ・ 練習したことのない路線に乗り換えるのはまだ不安があるので人に頼ると思う
7	評価 ・ 駅構内を歩くことにもっと慣れていったほうが良い 目標 ・ 前よりも慣れて落ち着いてきた感じがある ・ 慎重すぎるところもある	自信 ・ 電車に乗って改札を出るところまでは大丈夫 不安や期待 ・ 改札を出てからの広い空間の移動、乗り換えが不安
8	評価 ・ 別の日でも乗降動作ができていた ・ 点字ブロックや周りを見ることができていた 目標 ・ 自分で練習を重ねて電車に慣れていくこと	自信 ・ 今日行ったところは大丈夫 不安や期待 ・ 普段使わない場所のイメージがわからない
9	評価 ・ 別の電車でも乗降動作ができていた ・ 点字ブロックや周りを見ることができていた 目標 ・ 自分で練習を重ねて電車に慣れていくこと	自信 ・ 地下鉄は大丈夫 ・ 回数を重ねていけば電車は全て大丈夫だと思う 不安や期待
10	評価 ・ 駅周辺以外の夜間歩行 目標	自信 ・ 特に変わったところであれば自信をもって歩ける 不安や期待 ・ 今回の階段のような少し変わった構造や信号のない大きな通りの交差点はもう少し安全に気を配りたい